

初等教育教員養成課程におけるピアノ学習支援に関する一考察 —自主制作教材の活用を通して—

A Study on Piano Learning Support in Teacher Training Course of Primary Education:
Through the Utilization of Self-Produced Teaching Materials

篠原 友里

Yuri SHINOHARA

音楽教育ユニット

(令和3年9月30日受付, 令和3年12月23日受理)

要 旨

ピアノ学習経験のない学生がピアノ演奏に対して苦手意識をもつ要因には、楽譜が読めない、譜読みに時間がかかる、といった「読譜力」に関することや、鍵盤の位置が曖昧、鍵盤のどこが何の音なのか瞬時に把握できない、といった「楽譜の音符と鍵盤の位置をリンクさせる能力」に関する部分が不足していることが挙げられる。このような学生の、ピアノ演奏に対する根本的な苦手意識を克服するために、筆者が担当している「小専音楽」授業内で効率よく読譜力等を習得・向上させるための教材の制作を試みた。そしてそれを活用した実践から得た結果について、分析を行うとともに、学生への調査等を実施し、教材の効果を検証した。そこでは自主制作教材を活用して指導することによって、全ての学生の読譜力向上がみられた。またピアノを練習する実践の段階では、学生自身が、演奏能力や鍵盤認知能力の向上を実感できたことが明らかになった。

キーワード：初等教育教員養成課程、読譜力、楽譜と鍵盤の位置の認知力、ピアノ基礎技能

1. はじめに

小学校教員を目指す学生にとって、将来、教育現場（音楽の授業等）で活用できるようなピアノ演奏技能を習得することは、一つの重要な課題である。小学校教員採用選考試験においても、毎年実技試験が実施されており「令和2年度公立学校教員採用選考試験の実施方法について」によると、全68の県市中、35の県市において音楽実技試験が課されている現状がある。ピアノ演奏技能は、小学校の音楽科授業の際に必要な技能であるだけでなく、そのような採用試験の場面にも少なからず直結するため、学生としても、教員を目指すために必要な資質能力の一つとして意識しているようである。

筆者が担当している授業「小専音楽」は、ピアノ基礎技能の習得及び歌唱共通教材の弾き歌いを

主たる内容としており、本学の初等教育教員養成課程2年生が受講する必修科目（小学校における教科及び教科の指導法に関する科目）となっている。1クラスあたりの受講生は55～60名、長年のピアノ経験者から全くピアノを学んだことのない学生まで、ピアノ学習経験歴の幅広い様々な学生が混在している。この授業の最終試験では、ピアノ弾き歌いの実技試験を課している。

これまで授業を行ってきた中で、ピアノ学習経験のない学生の実技指導の際に、指定された楽曲はなんとか弾けるようになっているものの「楽譜が読めていない」学生が多いことに気付いた。楽譜が読める周りの友だちに教えてもらいながらすべての音符に階名を書き込み、その階名を見ながら弾いていたのである。もちろん授業では、楽譜の読み方をはじめ、音楽に関する基礎知識の指導

をおこなったのちにピアノ実技演習に移行する。しかし、この状態は「楽譜を読む」ことが「定着」していないということの現れでもある。授業でピアノ演奏技能の習得を目指すのはもちろんであるが、ピアノを弾くこと「だけ」が目的になっては、教育現場で実際に「活用」し得るようなピアノ基礎技能は身に付かないと考える。未知の曲を自分ひとりの力で演奏するためには、読譜力が必要不可欠であるからだ。副次的な指導と思われがちである楽譜の読み方を、ピアノ学習経験のない学生でも楽しく、モチベーションを保ちながら習得し、定着させることはできないだろうか。

本研究では、「読譜力」及び「楽譜の音符と鍵盤の位置をリンクさせる能力」の習得・向上を目指した教材を制作し、授業内でそれらを活用した実践から得た結果について、分析を行う。また、学生へのアンケート調査も実施し、学生の意識の変化や、教材の効果を検証する。

2. 授業の実際、学生の現状

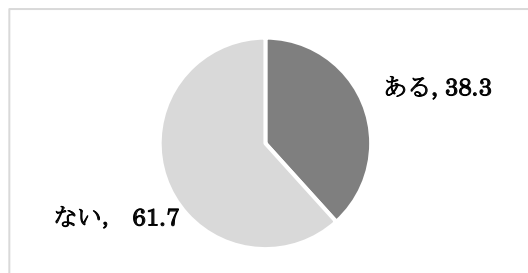
(1) 授業について

「小専音楽」授業は全15回あるが、2021年度前期の授業は、コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、第1～7回目授業は遠隔（オンデマンド型）で実施した（音楽理論の基礎の復習と応用について、資料を作成し、動画での解説等をおこなった）。第8～15回目授業は、実際にピアノ（キーボード）を使用した実技演習を行うため、感染防止対策を講じながら、対面で実施した。

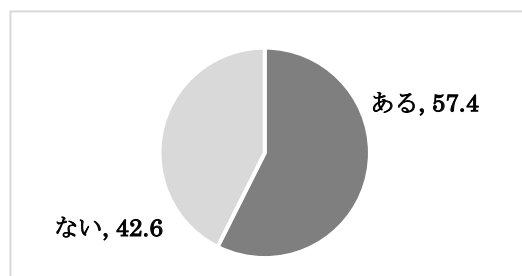
(2) 授業受講生のピアノ学習経験有無や、ピアノに対する苦手意識について

「小専音楽」受講生である本学初等教育教員養成課程の2年生55名に対して、授業開始前に、オンライン上で簡単な調査を行った。

図1の通り、全体の61.7%は、ピアノ学習経験のない学生であった。また、図2の通り、ピアノに対して苦手意識をもっている学生は57.4%と半数以上を占め、『どのようなところに苦手意識を感



(図1) ピアノを習っていたことがありますか



(図2) ピアノに苦手意識がありますか

じるか』と尋ねたところ「楽譜が読めないところ」「楽譜を読むのが遅いところ」「鍵盤のどこが何の音なのかを瞬時に把握できないところ」「左手と右手で違う動きをすること」などといった記述が主にみられた。

3. 自主制作教材活用の成果

(1) - 1 【ドレミファドリル】について

ピアノを演奏するためには、まず第一に楽譜が読めなければならない。いかに「素早く」「正確に」音を読むことができるか、という基礎的部分を、ピアノ実技演習前にしっかりと固め、定着させておくことが最重要であり、学生のピアノに対する苦手意識を克服する一助にもなると考え、ゲーム感覚で取り組めるような教材（ドリル）を

(譜例1) ドレミファドリルの例

ドレミファドリル1♩

学籍番号: 名前: 点数: /128



制作した。それが、1分の制限時間で音符の読み取りを行う【ドレミファドリル】である（譜例1）。出題音域は、五線より上または下の音符は加線1本の音までとし、ランダムに128音を並べた。ピアノ学習経験のない学生にとって、ト音記号の楽譜と、ヘ音記号の楽譜を同時に読んでいくことは困難であると考えたため、初めのうちはト音記号に慣れるトレーニングを集中して行った。（ト音記号の譜面の読み方に慣れたであろうと感じた第7回目の授業から、【ドレミファドリル】のヘ音記号バージョンも取り入れた）

このドリルを、毎授業、最初のトレーニングとして継続して行った。本来であれば、教員が1分を計り、緊張感をもって全体で一斉に実施することが望ましいと考えていたが、先に述べたように、今年度は第1～7回目の授業はオンラインで実施したため、（表1）のように指示し、個々で自宅にてトレーニングする形となった。第8回目以降の授業では、全体で一斉に実施した。

（表1）トレーニング方法の説明

【解き方】 音符の下に、イタリア音名（ドレミファソラシ）を書き込む。音高の区別はつけない。

①各自で1分計る。②1分で解けたところまでに、斜線を引くなどして、印をつけておく。③時間内に解けなかった残りの部分を、最後まで全て解く。（時間がかかっても、最後までしっかり解いてください。必ず力になります。）④答え合わせをする。⑤正解した音を1音1点として、「1分で解けたところまでの点数」を右上に記入する。⑥写真を撮って、提出する。

（1）－2【ドレミファドリル】の平均点

ドレミファドリルは、全14回実施した（第15回目授業では、実技試験前最後の個別指導の時間を十分に確保するため、ドレミファドリルは実施できなかった）。

（図3）の折れ線グラフは、クラス全体の平均点推移を表し、棒グラフは、ピアノ学習経験なしの学生から1人、ピアノ学習経験ありの学生から1人をそれぞれピックアップし、全14回の点数推移を表している。

学生A：ピアノ学習経験なし、ピアノに対しての苦手意識あり（楽譜を読むのが遅い）

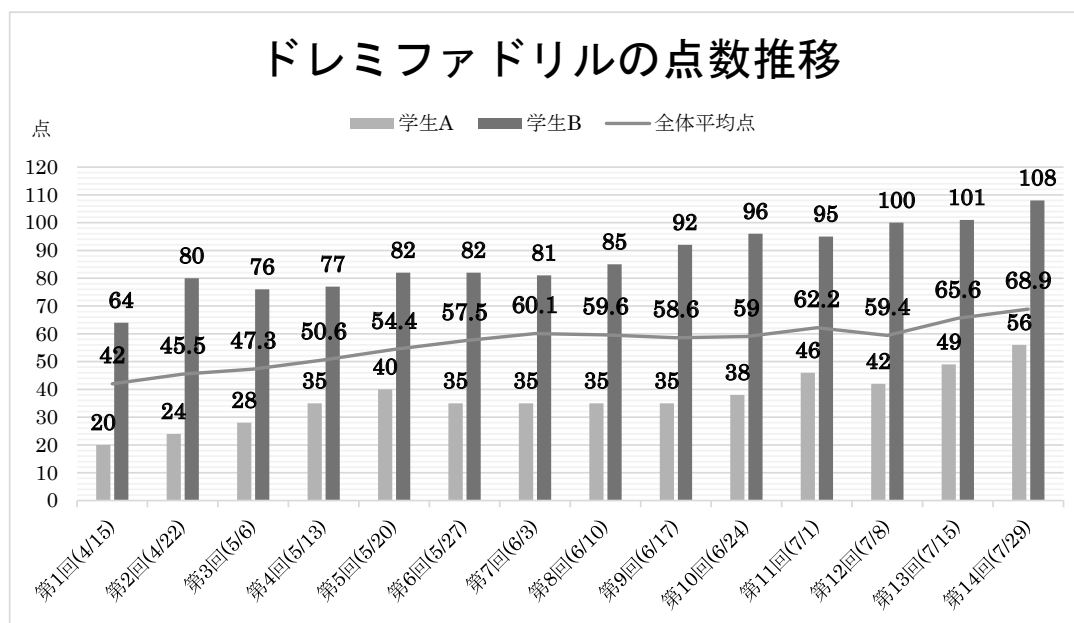
学生B：ピアノ学習経験あり（4歳～15歳の11年間）、ピアノに対しての苦手意識なし

（図3）の通り、全体の平均点は第1回目42点から第14回目68.9点と、26.9点アップするという結果となった。ピックアップした学生別にみても、学生Aは36点、学生Bは44点アップした。ピアノ学習経験がない学生Aに効果があることは予想できたが、ピアノ学習経験がある学生Bに対しても、予想していた以上に、読譜のスピードが速くなる効果がみられた。

第1回目の点数より、第14回目の点数が下がっている学生はおらず、全ての学生に対して、読譜力向上の効果がみられた。

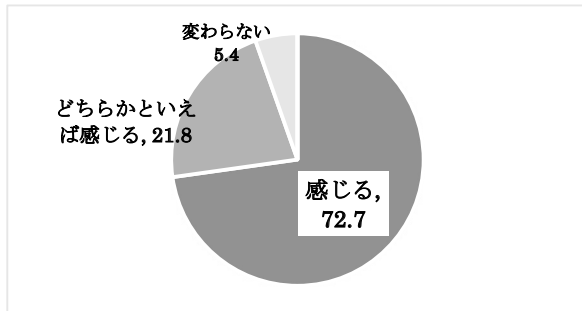
（1）－3【ドレミファドリル】の効果 —学生へのアンケート調査から—

学生が実際にドレミファドリルに取り組んでどのように感じているのか、アンケート調査を実施

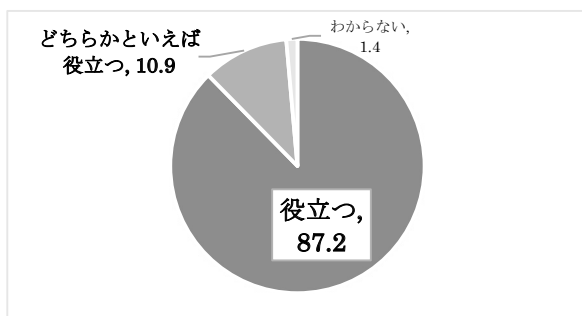


（図3）ドレミファドリルの点数推移

した。以下、その結果と考察を述べる。



(図4) 授業のはじめの頃に比べて、楽譜が読めるようになったと感じますか



(図5) ドレミファドリルに継続して取り組むことは、今後に役立つと思いますか

(図4)の通り、『授業のはじめの頃に比べて、楽譜が読めるようになったと感じますか』という問いに対して「感じる」または「どちらかといえば感じる」と回答した学生は合わせて9割以上であり(「あまり感じない」「感じない」という選択肢も設けていたが、そこに回答した学生いなかった)、点数推移グラフからも分かるように、ドレミファドリルに継続して取り組むことは、確実に、読譜力の習得・向上につながったといえる。また、(図5)の通り、『ドレミファドリルに継続して取り組むことは、今後に役立つと思いますか』という問いに対しては、ほぼ全員が「役立つ」「どちらかといえば役立つ」と回答した。

ここで、「役立つ」「どちらかといえば役立つ」と回答した学生に対して『どのような場面で役立つと思いますか?』という質問をし、自由記述欄に記入してもらった。

『どのような場面で役立つと思いますか』

- ・音楽の授業の中で、子どもたちに楽譜の読み方を教える場面。子どもの間違いにもすぐに気付くことができる
- ・楽譜に階名を書き込まなくても、分かる、弾ける

- ・授業や歌唱指導での音とり、伴奏をする場面
- ・より早く、正確に、譜読みができると思う
- ・音符が読めることで、新しい曲に取りかかりやすくなる
- ・初見で弾く際、よりスムーズに弾けるようになる
- ・いろんな曲に取り組めるし、音楽を楽しめるようになると思う

ここでの記述に多く見られたのは、読譜力の習得・向上は、小学校音楽科授業の指導場面での活用には有効であると思う、という意見であった。また、「音が瞬時に判別できるようになったため様々な曲に取り組みやすいと思う」「これからいろんな曲にチャレンジしたい」という意欲的な意見も見られ、非常に望ましい結果となった。

『ドレミファドリルについて振り返ってみて、良かった点・良くなかった点を教えてください』

- ・短時間で手軽に行えるトレーニングでよかった
- ・楽譜を読むことに抵抗がなくなった
- ・点数化することで、成長が目に見えやすく、更なるやる気につながった。
- ・ドから数えて読むのではなく、一目見ただけで何の音か分かるようになった
- ・ト音記号とヘ音記号の読み方の違いを理解することができた
- ・はじめの頃スムーズに読めないときに、続けることにパワーが要った
- ・ヘ音記号のドリルを始めると、ト音記号と混ざってしまったので、頭の中で読み方を早く切り替える練習が必要だと感じた

『ドレミファドリルに対する感想を聞かせてください』

- ・制限時間が設けられていることと、全体で一斉トレーニングすることにより、競争心が芽生えて、とても楽しかった
- ・点数化されることで、前回の自分より多く解けるようになると向上心をもつことができた
- ・楽譜を瞬時に読むことが苦手だったが、ドリルを継続して行うことで力がついたと感じるし、苦手意識を感じなくなった
- ・元々楽譜は読めていたが、自分がどれだけ読めているかの確認になったし、楽譜を読み取る力が向上していくことを実感できて嬉しかった

- ・音の読み方があっているか自信がなかったが、徐々に正答率も上がり、読める音符も増えて、自信につながった
- ・長い間ピアノを習っていたが、今までは音の読み間違いが多かった。今回のドリルで正確性とスピードが上がってとても嬉しい
- ・音楽がとても苦手で、ドレミファドリルが初めは全然解けず、やりたくないという気持ちが強かったが、だんだん分かるようになってくると楽しかったし、時間がかかったも最後まで毎回解いてよかったと思った

ドレミファドリルについて振り返ってもらい、ドリルの良かった点・良くなかった点や、感想について自由記述をしてもらったところ、以上のような回答がみられた。ドレミファドリルは、1分間という手軽さや、点数化されるという分かりやすさ、そして楽しみながらトレーニングできるところがポイントであり、良さであると考えている。学生の中には、楽譜を読むことに対して苦手意識が強く、ドリルの点数も伸びず、途中でじけそうになったという学生も数名いたが、最終的には楽譜が読めるようになったという実感を持っていた。点数の結果からも、学生の感想からも、ドリルの有用性が明らかになった。また、「継続することの大切さを実感した」「根気強く頑張ることで苦手なことも成長を実感できた」というような記述も見られ、今後の、音楽への学習意欲が高まる事が、大いに期待できる。(へ音記号のドレミファドリルの活用方法については、今後検討していかなければならない。)

(2) - 1 【「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせよう】ドリルについて

ドレミファドリルでは、「楽譜の音符を瞬時に読む」という訓練を行ってきたが、その次に、読めるようになった楽譜上の音符は「どの鍵盤を押さえればよいのか」という部分を瞬時に判断するトレーニングが必要であると考え、以下のような教材(譜例2)も作成した。トレーニング方法は(表2)の通りである。あくまでも、楽譜の音符と鍵盤の位置をリンクさせるトレーニングであるため、鍵盤は1オクターブ分のみ切り取って掲載し、音高の区別はつけない。出題音域は、「一点ハ音から一点ロ音」または「二点ハ音から二点ロ音」で、週によって出題音域を変更した。また、変化記号への理解も深めるため、54問中18問は、変化記号を付けた問題を出題した。

ドレミファドリルで音符の読み方に少し慣れた

(譜例2)「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせようの例

「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせよう③

54問

(表2) トレーニング方法の説明

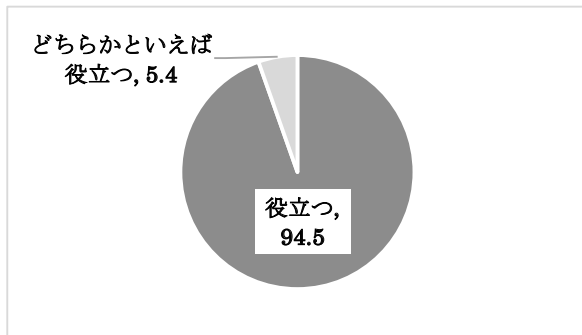
【解き方】楽譜の音符が示す鍵盤に、○をつける。

- ①各自で1分計る。
- ②1分で解けたところまでに、斜線を引くなどして、印をつけておく。
- ③時間内に解けなかった残りの部分を、最後まで全て解く。
- ④答え合わせをする。
- ⑤正解した問題を1問1点として、「1分で解けたところまでの点数」を右上に記入する。
- ⑥写真を撮って、提出する。

であろうと感じた第4回目の授業から、(譜例2)「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせようドリルを取り入れ、全8回実施した。実施できない週があったことや、出題音域を週によって変更

させたことなどから、このドリルの効果の検証は、ドリルの点数を用いず、学生へのアンケート調査からのみ行った。

(2) - 2 【「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせよう】の効果 —学生へのアンケート調査から—



(図6)「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせよう継続して取り組むことは、今後役に立つと思いますか

(図6)の通り、「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせようドリルに継続して取り組むことについて、全員が、「役立つ」「どちらかといえば役立つ」と回答した(「あまり役立たない」「わからない」という選択肢も設けていたが、そこに回答した学生いなかった)。

また、自由記述欄には、主に以下のようなコメントがあった。

- ・ピアノを練習する際に、楽譜を読みながらスラスラと弾けるようになって嬉しかった
- ・ピアノを弾くなかで、楽譜と鍵盤が一瞬で合致するようになり、格段に弾きやすくなったので、このドリルをやった甲斐を感じた
- ・教員を目指す上で必要なスキルが基礎から身についた
- ・楽譜を見ながらピアノを弾く際、指が自然と正しい位置に動くようになった

ピアノを練習するという実践の段階において、「楽譜の音符」と「鍵盤の位置」をリンクさせるトレーニングの効果がしっかりと発揮され、学生自身が演奏能力や鍵盤認知能力の向上を実感していることが分かる。ドレミファドリルと同様に、継続してトレーニングを行うことで効果がみられる

ことが分かった。

4. おわりに

本研究では、ピアノを演奏するために必要な「読譜力」及び「楽譜の音符と鍵盤の位置をリンクさせる能力」の習得・向上を目指し、自主制作教材を活用した実践から得た結果について分析を行うとともに、学生へのアンケート調査から、学生の意識の変化や、自主制作教材の効果を検証してきた。

二つの教材に取り組むことにより「読譜力」の習得・向上がみられ、「楽譜の音符と鍵盤の位置をリンクさせる能力」を身に付けることができたということが分かった。したがって、この二つは、ピアノ基礎技能習得を目指す学生にとって、実用的かつ効果的な教材であると考えられる。ピアノ演奏技能は急に上達するものではないため、ピアノ学習経験のない学生にとっては、ピアノ実技演習の初期の段階で苦手意識や抵抗をもつ場合が多いが、今回のようなドリルに継続的に取り組むことで、少しずつ、ピアノに対する苦手意識を克服していき、ピアノ学習への意欲向上や、練習への自発的な取り組みに繋がることを期待したい。

今後は、本研究の検討をより深めながら、ピアノ基礎技能習得を目指す学生にとって、更に効果的な教材を開発したいと考える。

参考文献

- ・文部科学省「令和2年度公立学校教員採用選考試験の実施方法について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1416039_00002.html (最終閲覧日: 2021年9月3日)
- ・木村次宏・篠原友里(2018)「小学校教員養成段階におけるピアノ基礎技能習得の意義—学校現場において求められる音楽的資質能力の育成を目指して—」,『福岡教育大学紀要』第67号第6分冊, pp.1~8.
- ・井本英子(2012)「音楽的基礎力向上の手法の実践と考察」,『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第3類, pp.10~16.
- ・平山裕基(2017)「保育者養成におけるピアノ弾き歌い学習支援の検討」,『音楽文化教育学研究紀要』XXIX, pp.55~61.